

11/13 詩篇 23 篇 「たとえ死の陰の谷を歩むとしても」

小池 宏明 牧師

今日の召天者記念礼拝では、詩篇の中でも多くの人々に愛されている 23 篇から「信仰者にとっての苦難と死」について注目してみたい。

*死の陰という欠乏

4 節前半「たとえ死の陰の谷を、歩むとしても、私はわざわざを恐れませんが、あなたがともにおられますから。」いつの時代の人間であっても、必ず「死」を迎える。この肉体を持って生きる人生そのものに「死の陰」が付きまってくる。人生は災いの連続かもしれない。生きることは常に死と隣り合わせなのだ。それでも「恐れませんが」と言い切る詩人がここにいる。「主が私の導き手であり、主が私と共におられる」からだ。主なる神様は、「私の、私だけのスペシャルな導き手、慰め主」なのだ。

*主の恵みが追いかけて来る

6 節「まことに私のいのちの日の限りいつくしみと恵みが私を追って来るでしょう。私はいつまでも主の家に住みます。」主と共にある人生では、日々のあらゆる場面で、主のいつくしみと恵みが追いかけて来るのだ。例え逃げようとしても「決して離さない」という主のご決意の表れだ。いつくしみとは、ヘブル語で「ヘセド」といって「契約の愛」とか「真実の愛」とか訳することができる。主なる神様が「羊飼ひ」で、人間が「羊」という例えは、実は、主なる神様と一人ひとりとの間の契約によって成り立っている関係なのだ。それゆえ、私たちは、主イエス・キリストに対する信仰の告白を大切にする。主イエス・キリストの十字架の死が、私の罪の身代わりであったことを受け入れます、と告白するだけで、主の守りと導きが、一生涯、いえ、とこしえに、追いかけて来るのだ。びっくり仰天するような主の恵みである。

*信仰の先輩たちに続け

私たちは、死の陰の谷を乗り越えて、永遠の御住まいに凱旋した、信仰の先輩たちを偲んでいる。私たちは、いつまでも、主の家、神の教会の交わりの中で生きることができる。それは地上の歩みが終わっても、永遠に主と共に、主の家に住み続けることができる幸いだ。信仰の先輩たちが遺して下さった数々の証詞に感謝しつつ、天の住まいに安らいでいる信仰者たちに続く者でありたい。苦難の時には、詩篇 23 篇を繰り返し繰り返し味わいたい。